

エルサルバドルを通して考える世界

所属	名古屋市立稲葉地小学校	実践者	中川 朋子	
対象	小学6年生	時間数	10時間	
場所	教室 大教室	実践教科	総合的な学習の時間	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・世界の文化に対する興味・関心をもつ。 ・エルサルバドルと日本とのつながりや課題を知る。 ・よりよい世界を築くための生き方を考える。 			
実践内容	回	プログラム	備考	
	1	◆世界がもし32人の国だったら 世界の人口、女性と男性の比率、大陸ごとの人口分布、世界の言葉に関するアクティビティを通して、世界の現状を大まかに理解する。	「ワークショップ版 世界がもし 100 人のむらだったら」 開発教育協会	
	2・3	◆小学生版 “貿易ゲーム” 3タイプの国(先進工業国、中進国、開発途上国)に分かれ、世界経済の偏りを類似体験する。	開発教育・国際理解教育ハンドブック	
	4	◆世界と日本はつながっている JICAのHP「日本・途上国相互依存度調査 世界は、キミにつながっている。」を視聴する。	JICA「世界は、キミにつながっている」	
	5・6	◆エルサルバドルってどんなところ？ ① 衣装、遊び道具、写真等に触れる。 ② エルサルバドルの概要や日本とのつながりを知る。	エルサルバドル BOX 教師海外チームで作成した P.P、海外研修で集めた写真	
	7	◆エルサルバドルの現状 ① 就学率の低さを知る。 ② 映画「イノセントボイス 12歳の戦場」を視聴する。	「イノセントボイス 12歳の戦場」	
	8 -10	◆みんなで描く世界の未来 ① 前回の振り返り ② 「こんな世界になるといいな」をみんなで考える。 ③ ②を新聞や絵にまとめる。 ④ ②を実現するために、自分がやろうと思うことを一つ考える。 ⑤ ホームステイ先で知り合ったエルサルバドル人や青年海外協力隊の人たちからのメッセージを聞く。 ⑥ 振り返り(思ったことや気付いたこと)	海外研修で撮った動画	
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・エルサルバドルをはじめ、世界の国々に対する関心を高めることができた。 ・世界と日本のつながりを理解することができた。 ・世界の正と負の面を理解した上で、どんな未来を創っていきたいか、また、そのために自分ができていることを考え、共有することができた。 		
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な情報を入れすぎたため、日本とエルサルバドルの共通点が分かりにくくなってしまった。 ・何を考えさせるのかを明確にして活動を絞る必要があった。 ・「できること」を「する」方向へ導く手立てが必要である。 		
備考				

[授業実践の詳細]

1 時限目 「世界がもし32人の国だったら」

1 子どもの活動の流れ

- ① アクティビティ1 世界の人口
- ② アクティビティ2 女性と男性の比率
- ③ アクティビティ3 大陸ごとの人口分布
- ④ アクティビティ4 世界の言葉
- ⑤ 振り返り

この時限のねらい

世界には、多様な言語や文化を持つ人々が住んでいることを体験的に学ぶ。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ どの子ども楽しそうに活動していた。
- ◇ 「大陸ごとの人口分布」のアクティビティでは、アジアの人口密度の高さを知り、「こんなに人がたくさんいるんだ。」「日本は狭いね。」と、感想を述べていた。
- ◇ 「世界の言葉」のアクティビティでは、英語よりスペイン語が第2位であることや、少数者の言語が世界から消えていっているという現状に驚いていた。

3 使用した教材

<教材1> 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら』第4版 2014年 DEAR 開発教育協会

2-3 時限目 「小学生版 “貿易ゲーム”」

1 子どもの活動の流れ

グループ作り…5～6人のグループを作る。

- ① ゲーム説明…ゲームの進め方を聞く。
限られた材料や技術をもとに、他のグループと交渉しながら、作った製品を売り、お金を稼ぐゲームであることを確認する。
- ② ゲーム開始
 - (1) 配られた封筒の中身を確認し、ゲームを始める。
 - ・Aグループ(先進工業国)…材料はそろっているが、原材料が不足している状況
 - ・Bグループ(中進国)…一部、原材料がそろっていない。ただし、材料の一部はAよりも多い。
 - ・Cグループ(開発途上国)…たくさん原材料は持っているが、高い技術をもっていない。
 - (2) 制限時間がきたら、手持ちのお金を教師に報告する。
 - (3) すべてのグループの収支一覧を見て、感想を述べる。
- ③ 振り返り

この時限のねらい

世界経済の偏りを類似体験し、工業原料や農産物を中心に輸出する国々の人々の思いを知る。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 子どもたちは、はじめ、何をすればよいのか分からない様子であった。



◇ しばらくすると、事を理解し始めたAグループが、B、Cグループに、材料を買いに行くようになった。

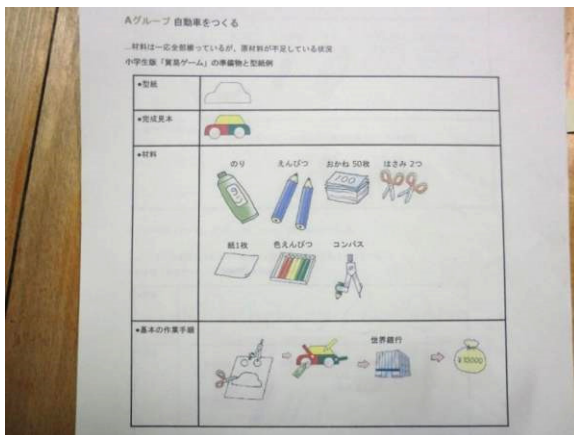


◇ その後、活発に3グループが交渉する様子が見られたが、違いがあった。

Aグループ…Cグループから安く原材料を買い上げ、製品を作り上げていき、楽しそうだった。

Bグループ…足りないものを他のグループから借りようとするが、うまくそろわず苦戦していた。

Cグループ…豊富な原材料をもって、他のグループに交渉に行くが、安く買われたり、断られたりして、やる気をなくす児童もいた。なんとか上手に話をして、交渉しようとする児童もいたが、ある程度の原材料が安く売れてからは、交渉が滞ってしまい、困っていた。



<Aグループへの指示書>

項目 グループ	当初の財産 ①	世界銀行からの 借入金 ②	最終の財産 ③	もうけ ③-①-②
A	5000円	0円	26100円	21100円
B	3000円	0円	12600円	9600円
C	1000円	0円	12000円	11000円
D	1000円	0円	1300円	300円
E	1000円	0円	200円	-800円
F	1000円	0円	1000円	0円

<収支決済一覧表>

◇ 子どもの感想

Aグループ:

- ・日本はAと聞いてうれしかったけど、ゲームの時に、他のグループのお願いを断ったら悲しい顔をしていた。それが心にグサツときた。
- ・前はCグループで貧乏だったけど、Aになったらケチになったような気がした。全然、物を貸さないようになってしまった。
- ・Cグループの気持ちは分かっていたけど、いざAグループになると物を貸すのを断っていた。

Bグループ:

- ・他のグループと条件付きの同盟を組み、両方に利益がでるようになってよかった。
- ・あまり冷静ではなかった。

Cグループ:

- ・国連がお金を貸してくれた。でも、自分たちは何もできなかった。資源が少なかったから。
- ・何もできなかったから、ムカムカした。
- ・道具(技術)と資源、両方が大切なことが分かった。

3 使用した教材

<教材2> 開発教育・国際理解教育ハンドブック HP

www.mofa.go.jp/mofaj/gaigo/oda/edu/kyouzai/handbook/html/h20103_4.html

5-6 時限目「エルサルバドルって、どんなところ？」

1 子どもの活動の流れ

- ① エルサルバドルに触れよう
伝統衣装、遊び道具、その他の場所に分かれて見学。
- ② クイズ大会
エルサルバドルに関するクイズ大会を行う。
- ③ ピニャータ割り
エルサルバドルの伝統行事「ピニャータ割り」を行う。
②のクイズ大会で、一番得点の高かったグループが代表で行う。
- ④ 振り返り(ここまで約60分)
- ⑤ フォトランゲージ
食べ物、服装、風景、お店の様子、人々などの写真を見て、気付いたことをグループで書き出す。
その後、ギャラリー方式で、共有する。
- ⑥ 振り返り(ここまでで約30分)

この時限のねらい

- ・エルサルバドルの衣装や遊び道具、伝統文化等に触れ、異文化を肯定的に受け入れ、多様性を楽しむ姿勢を養う。
- ・エルサルバドルと日本のつながりに気付く。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 伝統衣装や遊び道具、写真を見たとき、「わあ！」という声が子どもたちからあがった。特に衣装体験や遊び道具は大人気であった。
- ◇ クイズ大会では、日本とのつながりに関するものに対して、「へえ～。知らなかった。」とつぶやきながら、楽しそうに取り組んでいた。
- ◇ ピニャータ割りは、すでに英会話教室で体験している子もいた。なかなか割れずに苦労したが、子どもたちは大きな声で「右！右！」や「もっと上！」声を掛け、大盛り上がりであった。
- ◇ フォトランゲージでは、トヨタの車や漢字がプリントされている服など、日本とのつながりが分かるものをたくさん発見していた。「エルサルバドルに行きたい！」という声も聞かれた。



<伝統衣装を着て、記念撮影>



<ピニャータ割りの様子>

3 使用した教材

- <教材3> 教師海外研修で購入した衣装、遊び道具、教科書、国旗など
- <教材4> 教師海外研修で撮影した写真

7 時限目「エルサルバドルの現状」

1 子どもの活動の流れ

- ① 前時の振り返り
スライドを見て、これまで学習したエルサルバドルについて思い出す。
- ② これは何の数字？
エルサルバドルと日本の中学、高校の就学率を比較する。エルサルバドルの就学率の低さの原因として、貧困やギャング団の存在があることを知る。
- ③ 「イノセントボイス ～12歳の戦場～」
12歳の少年が、ギャング団に連れ去られていく様子を観る。
- ④ 振り返り
エルサルバドルで警官に守られながら研修を行った教師の体験談を聞く。その後、感想を書く。

この時限のねらい

エルサルバドルには、負の面もあることを知る。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ ②では、日本との違いに驚いている様子であった。「ギャング団」が理解しにくかったため、「10～20代の犯罪をしている少年集団」と説明した。子どもたちは、「10代？」と驚いていた。
- ◇ ③では、教師が場面の説明をしながら観させた。①の明るい雰囲気とは、真逆なものとなった。どの子ども真剣に観ていた。



<イノセントボイスの上映>



<銃を持った警官の写真>

◇ 子どもの感想

- ・いい面がたくさんあるエルサルバドルだけど、内戦が起こり、たくさんの人が亡くなった現実を知り、悲しくなった。
- ・就学率の話を聞いて、もっと勉強をがんばろうと思った。
- ・武器は人を守るだけでなく、傷つけるということを改めて思った。
- ・今まではエルサルバドルの素敵な面を見てきたけど、暗い面もたくさんあることを知った。もっと違う面も自分で調べてみたいと思った。
- ・どんな国も、いいことの歴史だけでなく、悲しい歴史もあるんだと思った。

3 使用した教材

- <教材4> 教師海外研修チームで作成したパワーポイント
- <教材5> 「イノセントボイス 12歳の戦場」 DVD
- <教材6> 教師海外研修で撮影した写真

8-10 時限目「みんなで描く世界の未来」

1 子どもの活動の流れ

- ① 前時の振り返り
写真を見て、前時までの内容を思い出す。
- ② こんな世界になるといいな
 - (1) グループでアイデアを出し合う。(派生図)
 - (2) 学級で共有する。(ギャラリー方式)
 - (3) 「こんな世界になるといいな」を絵や文字で表す。
 - (4) 発表する。
- ③ 今の自分ができること
 - (1) ②で考えた世界を作るために、今の自分ができのことを1つ考え、紙に書く。
 - (2) グループ内で発表する。
- ④ エルサルバドルからのメッセージ
ホストファミリーや青年海外協力隊の人からのメッセージを聞く。
- ⑤ 振り返り

この時限のねらい

- ・これまでの学習を振り返り、様々な側面をもつ世界の国々と協力して、どんな世界を作りたいかを考えることができる。
- ・その世界を作るために、今の自分にできることは何かを見つけることができる。

2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 「こんな世界になるといいな」では、どのグループもはじめはなかなか書き出さなかった。グループ内で少しずつアイデアが出始めると、その後は楽しそうに書き出す姿が見られた。
- ◇ 自分ができていることを考える時間になると、教室がシーンとなった。それぞれが真剣に考えていた。



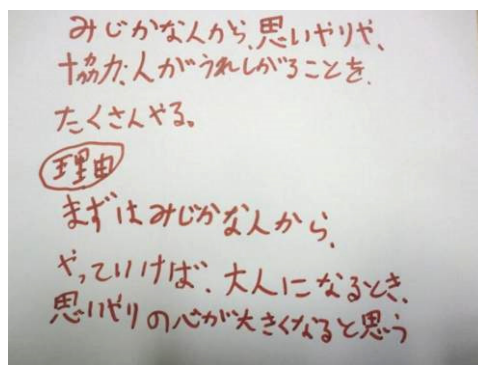
<振り返りの写真>



<児童が作成した派生図>



<エルサルバドルからのメッセージを観る様子>



<今の自分にできていること>

◇ 子どもたちが書いた「今の自分にできること」

- ・人の事を考える。困っている人がいたら、助ける。
- ・自分が悪口を言わない。いじめをしない。
- ・世界の色々な国のことを知る。「他の国を助ける」というと、その国を見下している感じがするから。
- ・世界の本を読む。色々な国のよいところや悪いところが分かるから。
- ・周りの人と仲良くする。家族や友達と仲良くする。
- ・地域のボランティア活動に参加する。
- ・まず、自分の身の回りの人が嬉しがることをたくさんする。
- ・募金をしたり、書き損じはがきやエコキャップ運動に参加し、みんなが学校や病院に行けるようにする。
- ・電車やバスで、お年寄りに席を譲る。

3 使用した教材

<教材7> 教師海外研修チームで作成したパワーポイント

<教材8> 教師海外研修で撮影した動画

■ 全体を通して**1 授業の様子**

- ◇ 「次は、エルサルバドルの勉強だよ」と言うと、「イエーイ！」と喜ぶ声があがった。エルサルバドルの文化を体験的に学び、「エルサルバドルに行きたい。」と言う子どもも多数いた。
- ◇ 正負の両面を取り上げたことで、「どんな国でもいい面や悪い面もある。それを知った上で、付き合い方を考えるべき。」という多面的に視点を持つ意見が出てきた。
- ◇ 「自分にできること」では、友達や家族といった身近な人とのつながりを大切にするという意見が、子どもから自然に出てきた。今後は、客観的に自分自身を振り返り、見つめ直す機会を作り、卒業式につなげたいと思う。

授業実践には、多くの迷いがあったが、エルサルバドルと日本をつなぐ一本の細い糸として、やれることはあるということに気付いた。とにかく「やってみる」ことが大切であった。私がこの目で見えて感じてきたことを、素直に子どもたちに伝えることが自分自身の役割だと改めて感じた。授業実践を終えて、この研修に参加でき、本当によかったと思った。

2 参考文献・資料

- 1) 『ワークショップ版 世界がもし100人の村だったら 第4版』 2014年 DEAR 開発教育協会
- 2) 開発教育・国際理解教育ハンドブック HP
www.mofa.go.jp/mofaj/gaigo/oda/edu/kyouzai/handbook/html/h20103_4.html
- 3) JICA HP 「日本・途上国相互依存度調査 世界は、キミにつながっている。」
- 4) 「イノセントボイス 12歳の戦場」 DVD